

読進協の発足

布川 角左衛門

◇出典『読書推進運動協議会の二十年』

1980年(昭和55年)2月25日 発行

社団法人 読書推進運動協議会 編集/発行

*初出『日本の読書運動・日本の社会教育 第七集』国土社 1962年(昭和37年) 発行

一 はじめに

ここに「読書推進運動協議会」(略称は「読進協」といえば、だれでもその字面からおよその見当をつけられるに違いない。もつとも、これがどういう実態のものであるか、この点になれば、いささか、わかりかねる人もいであろう。というのは、この名がかかげられて今年ようやく第三回の事業年度を迎えたにすぎないからである。しかし、この協議会の生いたちについて、昭和二十二年以来ながら「読書週間を主宰してきた」「読書週間実行委員会」が発展的に解消され、その一切を受けつぎ、昭和三十四年に創設されたものであると説明し、また、発足にあたって「読書週間運動から恒常的な読書推進運動へ」をキャッチフレーズにしたといえ、それだけで理解を深められるところが多いであろう。

要するに、名は新しくても、読書週間運動と読書週間実行委員会という前身がある。おなじように、出版および読書に関係ある諸団体が連携して出版文化の進展に寄与

することを旨とし、主力になっていくものも変わりなく図書館界と出版業界とである。ただ運動の路線をひろげ、強化するとともに一層の成果を期し、抱負を新たにしてい

て発足したものにほかならない。したがって、その動向は、このような移行がどうして起こったか、また、どんな意図がこれに託されたか、これらを起点とし、多くのことは今後こそかかっていると思われるべきであろう。

*この協議会の構成メンバーは、個人でなく団体である。図書館から日本図書館協会、全国学校図書館協議会、また出版業界から日本書籍出版協会、日本雑誌協会、教科書協会、日本出版取次協会、日本出版物小売業組合、全国連合会(現・日本書店商業組合連合会)、合わせて七つの代表的団体から成っている。このことは、その性格にも、事業にも、動向にも反映し、深い関係を持つている。

私は、「読書週間」の第一回から関係し、またこの協議会(以下「読進協」という)の結成にも参画し、さらにその発展に心をよせている一人である。初めに創立を

めぐる主要な経緯をたどり、ついでの後の状況を紹介し、最後に課題的なものについて私見をのべることにはしたいとおもう。

二 発足まで

一般にわが国の「読書週間」運動といえば、歴史は古く、その創始は五十年近くも前であるが、今年、第十六回を数える読書週間は、もちろん戦後の昭和二十二年に再開されたものである。この読書週間が回を重ね、約十年をへたころである。実は、これが幸いに全国的に普及し、盛大におこなわれるようになった反面、その推進に中心的な役割を果たしてきた実行委員会の活動やあり方は、ある曲がり角にきたといわれるようになった。そして、内省と批判をふくむ消極、積極の論議もなされるにいたったが、第十二回の読書週間がおわった後のこと、一つのまとまった意見として新しい構想が強うちだされた。これが読進協へ移行する動因となり、同時に、その歩みを定めたわけである。まず、その意見とはどんなものであったか。

*わが国の読書週間の歴史としては、戦前と戦後とに分けられる。戦前は、あの関東大震災によって大きな打撃をうけた社会事情を背景にして、その翌年、すなわち大正十三年(一九二四年)から日本図書館協会が主導して毎年おこない、昭和十四年(一九三九年)一般週間運動廃止令」によって頓挫するまで続いたのである。その後中断し、戦後のは、戦争によっていちじるしい惨禍をうけた状況のもとに、終戦翌々年、すなわち昭和二十二年、当時、出版界の中心団体であった日本出版協会が主となり、各方面に呼びかけ、実行委員会をつくって開始したものである。これらの大要については、「読書週間十年の歩み」(一九五六年「読書週間全国行事一覽」に付録として収録)を参照。

これについて、私はすでに書いたことがあるが、要するに「読書週間運動が全国的に普及し、さまざまな行事が自主的に計画され、展開されるようになった以上、実行委員会は、単に二週間のいわば花火大会のような行事の主宰だけに終始することから脱皮すべきで

ある。この週間運動の大きな指標は、読書意欲の高揚、読書習慣の助長、あるいは読書施設の充実、出版物利用の増大、不読者層の開拓など、これらこそであるはずであって、従来読書週間を機会にいろいろと提唱され、実行されてきたが、週間が完了すると、とかく中絶してしまう。こんなことであつてはなるまい。今日のような段階にいたつては、「読書週間」運動を「年間」運動とし、大所高所から、しかも常時、読書普及の推進をはかるようにすべきではないか、このために「従来の実行委員会を発展的に解消し、単に読書週間の主宰をするばかりでなく、年間を通じ、ひろく読書運動の推進を司る常設機関に切りかえるのが適切な措置ではないか」というのであった。

*「読書週間から読書推進運動へ」(『図書館雑誌』第五三巻第一〇号 一九五九年九月)

この意見は、追って三十四年七月、第十三回の読書週間を主宰する実行委員会に提案されたが、機はずでに熟していたように、異論

を出す者もなく、速やかに実行することが確認された。この構想による新しい機関が、いうまでもなく「読進協」である。私のメモによると、九月十日、設立準備委員会で名称も規約の大綱も決定した。以後、構成団体の諒解、役員の人選、事務局の構成などに日がすぎ、十一月十日、ようやく趣意書や規約を発表し、同時に創立ということになった。そして三十五年四月一日から事業を開始したというのが一応の経過である。

ここに新しい構想の一つとして計画されたのは、全国的な組織を持つことである。それまでは実行委員会が多くての協力団体を介して、一般に働きかけていたが、この方式を改め、道府県を単位とする地方読進協の結成をうながし、それらを一種のいわゆる協力組織にしよ

うというのである。
この呼びかけは、主として日本図書館協会によつておこなわれた。したがって、多くは県立図書館が中心になつて進められ、読進協はわずかながら助成費をだし、三十四年十二月に発足した徳島県読進協を最初に、三十五年には二十五の道府県に地方読進協が発足した。三十七年八月現在には二十七である。ここに参考としてその地方読進協をあげればつぎの通りである。

これらの地方読進協は、その地域の実情に依りて結成されたものである。したがつて、その構成団体の数や類が必ずしも一様でなく、たとえば、ここにみられるように、会長も県立図書館長であるとはかぎらない。結局、各地域における運動の中核となつて、自主的に運営されることを建前として

いるが、それ自体にせよ、中央との関係にせよ、この組織づくりは、

三 組織づくり

このように発足のあとをたどれば、これによつて読進協の趣意も役割も、察知されるであろう。読書週間実行委員会の諸情勢に依じた更生とも前進ともいえるが、こ

まだ中途である。これを対外的なこととするならば、読進協内部の組織的体制を確立することも、新しい構想として、

地域	結成年月日	(順)	現会長	役職
北海道	35・4・21	(15)	宇野親美	藤短大教授
秋田	35・2・24	(3)	豊沢武	県立図書館長
岩手	35・3・5	(5)	加藤廉平	県立図書館長
福島	35・3・21	(9)	阿部久次	福島大学長
茨城	35・2・27	(4)	宮崎慶一郎	報恩会図書館長
埼玉	35・3・17	(7)	大沢雄一	県図書館協会
千葉	35・4・15	(14)	児島健爾	千葉興業銀頭取
新潟	35・3・28	(11)	渡辺正亥	県立図書館長
山梨	35・5・4	(17)	小川 徹	県立図書館長
静岡	35・10・31	(26)	岩崎 亀	県議会議長
富山	35・3・28	(12)	中島 正文	県図書館協会
石川	35・6・15	(20)	真柄 要助	県図書館協会
滋賀	35・10・1	(23)	小林 重幸	県立図書館長
京都	35・5・20	(18)	豊島 覚城	府図書館協会
大阪	35・3・23	(10)	中村 祐吉	府立図書館長
鳥取	35・3・16	(6)	徳岡松太郎	県出版物小売業組合長
島根	35・4・1	(13)	小室 定彦	県立図書館
広島	36・3・6	(27)	高細 功	県公共図書館協会
岡山	35・3・21	(8)	大熊 立治	県総合文化センター館長
徳島	34・12・13	(1)	藤居 信雄	県立図書館長
香川	35・10・14	(25)	草薙金四郎	県立図書館長
愛媛	35・1・15	(2)	三宅千代二	県史編纂委員長
大分	35・5・2	(16)	串田 順	県立図書館長
熊本	35・8・26	(22)	蒲池 正夫	県立図書館長
宮崎	35・6・25	(21)	日高 弥一	県高校PTA連合会長
鹿児島	35・10・8	(24)	羽牟 応輔	県PTA連合協議会長
佐賀	35・6・7	(19)	馬場 勇道	県図書館協会

規約のうちに定められた。それまでの実行委員会は、年毎に出版業界と図書館界の主要団体選出の委員によつて構成されることを慣例としていたが、これを改め、任期二年の理事、評議員制度をとつたこと、また、中央の常設機関としてその事務局を新設したこと、あるいは各構成団体から選出された委員によつて、財務、地方連絡、読書週間の三常置委員会をつくり業務の分担を定めたこと等、これらが主な点である。但し専任の事務局員以外は無報酬であつて、すべてが善意によつて運営されていることは実行委員会当時と同じである。

さらに、改善の一つをあげるならば、賛助会員制をとつたことである。読進協の目的や事業に賛同する法人または個人を特別賛助会員あるいは賛助会員とし、特別賛助会員からは年額五万円を一口として一口以上、賛助会員からは年額五千円を一口として一口以上の献金を仰ぐことにしたわけである。三十七年四月現在、特別賛助会員は二十六社、賛助会員は三十五社。出版業界ならびにその関係業界から参加をえているが、この会員の支援によつて財政的基礎を安定させようというのが大きなねらいである。

四 いくつかの事業

さきに記したように、読進協は昭和三十五年を第一事業年度とし、第二事業年度をすぎ、現在、第三事業年度にかかっているところである。その第一、第二の年度におこなった事業にはどんなことがあるか。読進協の年次報告によつて、いくつか紹介しよう。

まず、その成りたちからいって、第十四回および第十五回の読書週間を引き続いて主宰したことは、改めていうまでもない。この委細は別として、新しく計画された継続事業の一つは、「こどもの読書週間」の主宰である。「秋」の読書週間に対して、「春」の読書週間（期間は「こどもの日」を中心に五月一日から十四日まで）といえるが、もちろん読書週間運動の拡大である。

第二には、全国の「読書会実態調査」を三十五年度から開始したことである。これは読書推進運動の一つとして読書会の育成を懸案とし、その基礎的資料のために、地方読進協および未結成地域の県立図書館の協力を得ておこない、なお継続中のものである（調査内容は、読書会の所在、名称、会員数、責任者であつて、三十六年三月現在の結果では、東

京都、長野県、和歌山県をのぞき、読書会数は八三三五、会員総数は二万三三四八三名となつてい

る。これらの調査にもとづいて追つて連絡のとられるようになれば、大きな意味をもつ事業に発展するであろう。

その他、行事としては、「児童養護施設への図書寄贈運動」（三十五年の「こどもの読書週間」にあたり、出版社や地方新聞社の協力により、地方読進協のある地域十三の施設およそ二百か所にたいして、児童用図書一五〇〇冊を寄贈。これはとくに大きな反響をよび三十六年には、七十一

の出版社から無償で提供された図書二万一九九冊を三十一都道府県の児童養護施設三百二十五か所および少年院、少年鑑別所十九か所などに寄贈）、「読書グループ代表者懇談会」（三十六年秋の読書週間にあつて、二十七

五 課題的なもの

の地方読進協との共同行事とし、それぞれの地域で読書グループの現況などを共通テーマにしておこなわれた懇談会。この記録は追つて取りまとめられるはず、「青少年読書指導のかくれ功労者の表彰」（三人の少年がアルパイトをつくつたという東京北区王子の青空文庫を、三十六年の「こどもの読書週間」にあつて

表彰）、「読書の歌の歌詞募集とそのレコード作製頒布」（三十六年秋の読書週間の一行事として、まず歌詞を一般から募集し、ついで入選作二篇を作曲の上、レコードに作製して全国に発売頒布）など、多くが記録されている。また、地方読進協や構成団体によつておこなわれた運動や事業となれば、かぎりが無い。しかし、その一つをあげるまでもなく、読進協の事業面における諸相は、これらによつて一応うかがえるであろう。

さて、この読進協にとつて、どんなことが課題であろうか。こういえば、それぞれの立場からいろいろな意見や問題が提出されるに違いない。というのはたとえ、運動や事業の面でおこなつてよい類の事柄があまりに多いからである。中央の読進協自体としても、

第三事業年度の計画を、地方読進協の組織、読書グループの育成、行事、集会、調査、文書宣伝、その他に分け、立案がすでになされて

いる。これだけでもできるだけ効果的に実行することは、もちろん当面の課題として十分である。しかし、関係をもつ一人としてここに発言するならば、読進協の緊要な問題は、予定された事業活

動の類や量よりも、その基盤となす諸条件にあるといわなければならない。多くの人々の善意と熱意と知恵と理解と協力の上にたつ文化的諸運動の通例として、とくにこれを多年にわたたり、いきいきと持続してゆくことには、いろいろのむずかしさがある。他はおいても、第一に、財源の問題がある。

第二には、支援者の関心の消長と事情の変化がある。第三には、協力体制の強化もつねに必要である。第四には、社会状況にに応じて新しい手をうつつてゆかなければならない。といえ、読進協も、この例外では決してありえないわけである。

◆布川角左衛門（一九〇一—一九九六）
28年岩波書店に入社。58年栗田出版販売（当時栗田書店）取締役就任。後に社長を務め、79年から筑摩書房管財人として同社再建に尽くすなど、出版界で広く活躍された。

読書週間の開始以来その経済的援助をしてきた多くの出版業者の関心は、いささか薄くなつてい

る。どうしたならば、賛助会員をふやして、また、その協力を伸長することができ

る。組織作りは未だ中途にある。各地域にはそれぞれの事情があるにせよ、どうしたならば、全国的な組織網をすみやかに実現することができ

る。個人で収集した膨大な図書・資料の多く（約2万5千点）は国立国会図書館に寄贈され、現在「布川文庫」として公開されている。